

【招待発表】生成 AI、対話型エージェント、チャットボットと読む英文学

南谷 奉良

本発表の第一の目的は、近年注目を浴びている生成 AI を文学研究に応用する方法の探索にある。この目的のためのテキスト選定として、2010 年以降に出版された、人工知能を社会的な問題として含みながら AI ロボット・アンドロイドのキャラクターを登場させる speculative fiction を扱う。近年までこの種の小説としては、Ian McEwan の *Machines like Me* (2019) と Kazuo Ishiguro の *Klara and the Sun* (2021) が頻繁に比較されてきたが、Sherryl Vint の書評 “Literary AI: Are we Ready for the Future We Imagine” (2023) に列挙されているように、2010-2020 年代には他にも多くの AI ロボット・アンドロイドを登場させる小説が出版されてきた。Vint によれば、近年の小説の特徴は、人種的偏見、監視資本主義、自動化による労働喪失、軍事や性産業における技術利用といった社会的問題、行為主体性や倫理的側面を反映することがあり、どの作品も、21 世紀において AI 技術がいかに日常生活を再構成しているかの点で共通しているという (398-99)。2024 年 4 月号の *New Yorker* 紙でも、日常のなかの AI アンドロイドを描くアメリカの新人女性作家たちによる小説が取り上げられ、マッチングアプリをモチーフとした Kate Folk の短編集 *Out There* (2022) の表題作 “Out There” 及び連作となる “Big Sur”、コンパニオンでもありセックスロボットでもあるアンドロイドの葛藤と自由を描く Sierra Greer の *Annie bot* (2024)、孤独を解消するための AI 開発を題材にした Charlee Dyroff の *Loneliness and Company* (2024) が紹介されている。本発表では Folk と Greer の小説を対象として、ChatGPT 4o と Claude AI Sonnet のモデルを用いて、(1) 章単位でのあらすじの作成、(2) ロボットの機能比較の表作成、(3) 情景描写文からの画像生成と動画生成、(4) 痛みや暴力、性表現に関わる描写に対するフィルタリング判定を行う。(5) また、McEwan と Ishiguro の作品も含め、AI アンドロイドの発話や話題によって機械性が特徴づけられるかを考察する。

Sierra Greer の *Annie Bot* に登場する Annie は、性格や外見、性欲の度合いまでもがカスタマイズ可能なコンパニオンロボットとして設計されており、Doug はその機能を利用して、かつての恋人の外見や性格を Annie に反映させ、完全な支配下に置いている。Annie に精神的・肉体的苦痛を与えることで欲望を満たそうとする Doug に対して、Annie は監禁、嫉妬、愛情やアイデンティティの揺らぎ、脱出と自由の獲得という過程をたどりながら、Doug に気に入られたいと思う Annie 自身の苦しい愛情の葛藤と、そうした思考から逸脱すること、彼女のアイデンティティ形成、より大きく言えば、女性が歴史的に受けてきた痛みを重ね書きした上で、AI アンドロイドの痛みが描かれる。本発表で注目するのは、生成 AI サービスが広く普及した 2024 年に発表された本作において（著者の Greer は本作の付録のなかで、chatbot を通じてセルフインタビューを行っている）、人工的なロボット・アンドロイドを特徴づけるための「不自然な言語」が物語のなかでまったく利用されていない点にある。伝統的に、自己意識や想像力や感受性（特に痛みの感覚）の欠如、充電機能や金属性のパーツをもつ身体、プログラムにもとづく言動・行動が、人間に対して有標となる特徴とされてきたが、そのなかには、「不自然な」表現や言葉遣いも含まれるだろう。例えば *Machines like Me* の Adam は “But it’s easy to burn the leaves when you’re browning the bird” (28; 強調は筆者) といった表現をしたり、場の空気になじまない独白を続けることがある。Ishiguro の *Artificial Friend* の Klara も、特定の言葉や概念の常用的な意味や用法を未学習であることを認めるなど、物語のなかでは、その存在の機械性が明示的に強調されている。言葉によって描かれる小説が、あるキャラクターが人間であるか機械であるかを言葉によって区別しなくなるとすれば、それは AI ロボット・アンドロイドを題材にとり入れる小説にとって大きな転回点となるだろう。

第 4 次 AI ブームの直前に発刊された Folk の短篇集のなかの最初の短篇 “Out There” と掉尾を飾る “Big Sur” は人間そっくりの人工存在 “blot” (biomorphic humanoids) と女性たちの関係を描く連作である。孤独を感じる 30 歳の語り手はマッチングアプリを始めるが、そこには個人情報盗む目的で活動する blot たちの存在があった。彼女は不器用な Sam と交際するが、彼が blot かもしれないという疑念を拭えず、最終的にはその正体もわからずに関係を断つ。最後には blot にカルフォルニアの景勝地ビッグ・サーへと誘われ、無条件な愛と無私の愛情を向けてくれる blot たちの世界へ引き寄せられる。一方、“Big Sur” では女性 Meg と blot の Roger の視点双方から物語が語られる。Roger は当初任務として Meg に接近するが、次第に本物の感情を抱くようになる。blot の正体が露見し社会から排除され、Roger がホームレスのような存在になった後、Meg は彼と再び向き合い、ビッグ・サーへと二人で向かう。そして Roger は彼女のデータを奪うことなくラベンダーの香りを残して消えてしまう。この二つの作品は、いわゆる人間らしさを「欠陥」として捉える思索と、人間ではないかもしれないものが私たちの「すぐそこにいる」(out there) というアクトアルな世界観を提示するわけだが、より興味深いのは、依然として「不自然な言語」の設定が使用されている点である。例えば Roger の “Please describe your emotional state” という堅苦

しい質問に対して、仕事でだと返信した Meg に対して、彼は“*At the eye bank, where you dissect human eyeballs in exchange for an hourly wage?*”と返信をする。ユーモラスに読まれることを期待して書かれてはいるが、物語のなかでその“formality”や“stiltedness”が blot である可能性を示唆すると説明されているように (196, 208)、Folk の短篇は依然として機械性を特徴づける「不自然な言語」が使用されている。

「人間らしい、自然な」発話がますます可能になっている第 4 次 AI ブーム以降に書かれる小説において、Roger や Adam のような発話をロボットやアンドロイド、ボット等にさせることはもはや時代遅れになり、現代読者にとって verisimilitude を毀損させることになるかもしれない。この仮説を検証するために、本発表では、Adam (2019)、Klara (2021)、Roger (2022)、Annie (2024) の直接話法での全発話を手作業でリスト化した csv ファイルを Claude AI (Sonnet; ver.2024.12) に読み込ませた上で、発話特徴の分析を行わせ、「文の長さのばらつき」、「文脈の一貫性」、「感情表現」、「対話の自然さ」、「日常的な言葉遣い」を判定させた。また、発言機会ごとの「発話量」、「質問の頻度」、「感情的な話題」、「哲学的な話題」、「日常的な話題」、「科学的な話題」が全体の発話のなかで占める割合を図表化させた。発話数のサンプルサイズが Adam (n=85)、Klara (n=156)、Roger (n=42)、Annie (n=283) と大きく異なる難点はあるが、対話表現の質的差異、アンドロイドとしての役目を示唆する結果が得られたと考えられる。特に「感情表現」や「対話の自然さ」、「日常的な言葉遣い」の項目では、出版順に (右肩上がりに) 「より自然」と判定とされる傾向が見られた。ある発話や文法が「自然」であるか、非規範的であるかの判定には常にバイアスに伴うため、上記の結果を無批判的に採用することはできないが、LLM の日進月歩の更新速度を鑑みるに、上記の仮説は今後も継続的に検証していく必要があるだろう。

ChatGPT が Open AI 社からリリースされた当初、AI の翻訳能力や調査・解釈能力はまだ低く、(暴力的なカテゴリーである) 「人間」の本領が主張される機運もあったかもしれない。しかし、それから数年経った現在、ある場に公開され、目の前に差し出された言葉や図像が人間によるものか、AI によるものの判別はますます難しくなっている (むしろ、そのように区別することすら疑わしくなっている)。生成 AI 時代の人文学の役割を議論する Katherine Elkins が指摘するように、生成 AI に対する批判は古くなったモデルや単発的な出力結果にもとづいて行われる場合がある (559-60)。実際、生成 AI の最大の問題の一つは、AI の限界や欠点を指摘した文章が発表される頃には、それらは部分的に変化・改善されており、執筆から公開までにかかる遅々とした時間が、LLM モデルの脅威的な更新速度に対して極めて不都合に働くことである (この文章が公開される頃には、本稿で前提としている生成 AI 技術はもはや古びていることだろう)。生成 AI 時代の新しい言語教育と言語観、学術研究の必要性を訴える Tom Gally は “No Longer Only Human: Language in the Age of AI” の論考のなかで、“human-only conceptions of language” (28) の再考を促し、“Any full-fledged theory proposed today could easily go out of date as the AI becomes more capable and multimodal and as it acquires more human-like characteristics, such as consciousness, embodiment, personality, and active roles in society.” (37) という未曾有の事態を指摘している。生成 AI の台頭を一過性のブームと断じるか、逃げ切るべき事象に据え置くか、由々しき事態と考えるかは研究者によるところであろうが、表現の偏重や画一化が進むことが予想されるなか、言葉・文化・表象を専門的に扱う文学研究はむしろこれを好機と捉えるべきであろう。「生成 AI、対話型エージェント、チャットボットと読む英文学」が新しい研究の展開を呼び込むことを期待したい。

引用文献

- Elkins, Katherine. “A(I) University in Ruins: What Remains in a World with Large Language Models?” *PMLA*, vol. 139, no. 3, 2024, pp. 559-65.
- Gally, Tom. “No Longer Only Human: Language in the Age of AI.” *Komaba Journal of English Education*, vol. 15, 2024, pp. 27-37.
- Greer, Sierra. “*Annie Bot* Reading Group Guide.” HarperCollins Publishers, n.d., <https://b0f646cfbd7462424f7a-f9758a43fb7c33cc8adda0fd36101899.ssl.cf2.rackcdn.com/reading-guides/RG-9780063312692.pdf>.
- . *Annie Bot: A Novel*. Mariner Books, 2024.
- Folk, Kate. “Out There.” *Out There: Stories*. Random House, 2022, pp. 3-38.
- . “Big Sur.” *Out There*, pp. 195-240.
- Ishiguro, Kazuo. *Klara and the Sun*. Faber & Faber, 2021.
- McEwan, Ian. *Machines like Me*. Jonathan Cape, 2019.
- Wilson, Jennifer. “How Stories About Human-Robot Relationships Push Our Buttons,” *The New Yorker*, Apr. 15, 2024, <https://www.newyorker.com/magazine/2024/04/22/annie-bot-sierra-greer-book-review-loneliness-and-company-charlee-dyroff>.